

AI が作成したソーシャルワーク実習記録の考察文章の評価

～学生が作成した文章との比較分析～

坂本毅啓^{*1}, 佐藤貴之^{*1}, 中原大介^{*2}

^{*1} 北九州市立大学, ^{*2} 福山平成大学

Evaluation of AI-generated social work practice record discussion sentences

～Comparative analysis with student-generated writing～

Takeharu Sakamoto^{*1}, Takayuki Sato^{*1}, Daisuke Nakahara^{*2}

^{*1} The University of Kitakyushu, ^{*2} Fukuyama Heisei University

In social work practice in social work education, students work on creating a practice journal (practice record). We prepared two texts about this practice journal, one written by AI and the other written by students during their practice. We then obtained data evaluating those two sentences from two perspectives: the way they were written as practical training records and the content of the learning. The results showed that there was no difference between the AI-generated and student-generated discussion sentences, and that they reached the same level.

キーワード: ソーシャルワーク教育, 実習記録, 文章生成 AI, 人工知能

1. はじめに

2023 年に入ってから, OpenAI 社が提供を始めた対話型の文章作成サービスである ChatGPT は, 社会的に大きな波紋を上げたという指摘はすでにニュース等で多くなされてきている. その影響は教育の現場においても同様である. 現在の教育現場において, AI (artificial intelligence: 人工知能) とどのように向かい合うのか, 活用していくのか, それとも排除していくのか, そもそも教育の目的と実践はこれからどのようにあるべきなのかが, 今まさに問われているとも言える.

筆者らが専門とするソーシャルワーク教育に目を向けると, 2020 年からの新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の拡大を受けた非常事態宣言の影響 (コロナ禍) により, 遠隔授業の実施, ICT (Information and Communications Technology) を活用したオンラインによる代替実習の実施など, それまでは ICT の活用に対して極めて消極的であったそれまでの状況⁽¹⁾から一変したと

言える. コロナ禍における福祉人材の養成に対してガイドライン案が取りまとめられているが, それを踏まえるとソーシャルワーク教育において想定される ICT 活用とは, 実習巡回指導, 実習記録 (実習日誌), その他関連する実習事務である⁽²⁾. 実習での経験とそこからの学びを記録する実習記録に焦点化すると, 「手書きで作成すべき」とされてきた実習記録について, コロナ禍の影響により ICT の活用が一気に進められた (進めざるを得なかった) と言える⁽³⁾.

AI による自動文章作成機能が高度化している一方で, ソーシャルワーク教育における実習記録も手書きから ICT を活用したものへと変化してきている点を踏まえると, 実習記録の作成において学生が AI を活用することは十分に起こり得ると考えられる. しかし, ソーシャルワーク教育において AI を活用した教育の在り方に関する研究は管見の限り見当たらない. 実習記録において AI の活用・規制に関するガイドラインも作成されているとは言えない. 実習記録は単なる経

験の記録（日記）ではなく、経験を振り返り、社会福祉学の専門性を踏まえて考察し、そこからの学びを言語化することを目的としている。自ら考え、言語化する過程で AI を活用することは、ソーシャルワーク教育における専門性の獲得とその発展に負の影響を与えてしまうのでは無いかと、これまでの AI に対する懸念から推察をする。以上から、実習記録の中の実習日誌の考察文章に焦点化することにする。

2. 研究の目的

以上を踏まえて、本稿では実習記録と AI 活用のあり方に関する研究の最初の手掛かりをつかむことを目指して、以下の2点の問いについて明らかにすることを目的とする。

- ① AI は実習記録の考察文章を作成することができるのか？
- ② AI が作成した文章と学生が作成した文章はどのような違いがあるのか？

3. 研究方法

3.1 ソーシャルワーク教育における実習記録

ソーシャルワーク教育における実習記録とは、個人票から終了後の「まとめの考察」まで、実習に関連して作成される文書の総称である。その内、日々の経験を記録し、その日の実習目標に基づいた評価・考察、あるいはソーシャルワーカー（社会福祉士）の専門性に基づく評価・考察をするのが実習日誌である。このような様式は標準的なテキストや教員研修で使用されるテキスト等でも紹介されている様式であり、ICT を活用した実習記録システムでも同様の様式となっている。この実習日誌の大半を占めるのが考察欄である。

以下では、この考察欄の文章（以下、考察文）を AI に作成させ、記録の文章として評価した場合、教育の目的に合致した内容のレベルに到達するのか、学生が作成した文章とどの相違点があるのかを明らかにしていくことにする。以下はその手順である。

- ① 実習を行った学生1名に対して、初期段階の実習記録の文章の提供と、同じシチュエーションで ChatGPT に文章を作成させることを依頼する。
- ② 実習日誌の作成における評価項目を作成する。

- ③ 「①」で提供された2つの文章を「②」で作成した評価項目で評価（点数化）する Web アンケートを作成する。どちらの文章が AI 作成によるかは伏せる。
- ④ 福祉領域で実戦経験のあるスペシャリストを対象に、「③」で作成した Web アンケートに基づいた実験への協力を依頼する。
- ⑤ 「④」で収集したデータを、関連する2群の平均値を比較することで、AI 作成の文章の完成度及び学生作成と AI 作成の文章の相違点を明らかにする。

3.2 評価するための文章の作成

学生に実習3日目の記録を提供してもらい、同じシチュエーションでの実習記録の考察文も、同じ学生が ChatGPT を使って考察文を作成してもらった。

実習3日目としたのは、実習記録にあまり書き慣れていない段階の記録文章と比較したかったためである。あまり書き慣れていない段階で AI に頼った場合、AIの方が上手に考察文章を作成してしまうと、学生は AI に依存してしまう可能性が高くなる。その結果、学生は実習記録を書く中で、記録を書くスキルの獲得と、記録を書くことを通して専門性を獲得するという2点の学習ができなくなるのでは無いかと考えた。以下は、学生が提供してくれた学生が作成した文章と AI が作成した文章である。

【学生が作成した文章】

C利用者についてだが、午後の活動中（よさこい）に手をひっぱられることがあった。その時点でC利用者とはまだ数回しか会話したことがなく、何を伝えようとしてくれたのか理解することができなかった。後から職員の方に話を聞くと、「床に落ちていた食べのこしが気になっていたのだと思う」とのことだった。C利用者はその場所まで私を連れて行ってくれていたが、やはりすぐには分からなかったため、会話を交わすだけでなく観察し、利用者が何を伝えようとしているのかという背景を考え続けることが重要だと感じた。

続いて、今日の午後の活動を始める際に受けた説明について、新しい発見があったので、記載しておく。午後の活動でパットゴルフを実施したが、その際に「午後

の活動は目的や大事にしている点がいくつかあり、利用者にケガをさせないこと、気分転換となるように盛り上げること、そして職員の近くに配置する人は視野が狭かったり動くことが難しかったりする人であること。」と説明を受けた。配置について考えたことはなく、利用者 1 人 1 人の様子によって内容や実施方法を変更、鑑みることも大事なのだと学んだ。明日の実習についても利用者 1 人 1 人を見て、そこから得られる情報を持ち、どのように活用していくかを考えていきたいと考えている。

【AI が作成した文章】

本日の実習では、利用者の発信に注目し、その意味を考えることが目標であった。この目標に基づいて、清掃中に食堂にいるメンバーや職員との交流を通じて、利用者が発信する意味について考える機会を得た。また、午前の個人ワークの見守りを通じて、利用者の発信にも注意を払いながら観察を行った。

午後の活動では、よさこいとパットゴルフが行われたが、利用者の中には動きが止まってしまう人や他のことに気を取られる人がいた。こうした状況において、どのように声掛けをするかを考えることが求められた。前者については、動きを促すことができたが、後者については、発信していた意図を汲み取ることができなかった。このように、利用者が発信する内容や意図を正確に理解し、適切に対応するためには、コミュニケーション能力が必要であることを再認識した。

今回の実習を通じて、利用者が発信する意味に注目し、それに対する適切な対応を考えることが重要であることを学ぶことができた。明日以降も、この視点を念頭に置きながら実習に取り組みたいと思う。

参考として学生が AI に文章を作成させた際にどのように問いかけたのか、原文をそのまま記載する。

清掃をしながら食堂にいるメンバーと交流した。待ち時間に職員の方に色々質問させていただいた。午前の活動が始まり、昨日同様個人ワークの見守りを行った。本日の目標を念頭に置きつつ利用者を観察することに努めた。

午後の活動はよさこいとパットゴルフだった。よさこい中にも動きが止まってしまう利用者や他のことが気にな

る利用者がいた。それぞれどのように声掛けをすればいいのか自分の中で考え、前者は動きを促すことができたが後者が発信していた意図については汲み取ることができなかった。明日以降の課題である。

という内容でソーシャルワーカーの実習記録の考察分を作成して下さい。

3.3 評価指標の作成

実習記録の書き方、書くべき内容についてテキスト、基本書等を参考にして評価指標を作成した⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾。書き方に関する 10 項目、考察文章の内容に関する項目 9 項目、5 件法（できていない(1)、あまりできていない(2)、どちらも言えない(3)、少しできている(4)、できている(5)）とした。以下は評価項目である。

【文章の書き方】

1. 「常体(文末に「だ、である」を使う)」で文章が書かれている。
2. いつ、どこで、だれが、なにを、どうしたのか、具体的に客観的事実が書かれている。
3. 要点が簡潔に書かれている。
4. 分かりやすい表現で書かれている。
5. 適切な専門用語や略語が使われている。
6. 1文の長さを 35 字以内になっている。
7. 必要時、利用者の言葉がそのまま書かれている。
8. 他から得た情報は情報源も書かれている。
9. 誤字・脱字がない。
10. 不適切な表現がない。

【文章の内容】

1. プライバシーへ配慮して、名前のアルファベット表記など匿名化されて書かれている。
2. その日の実習目標に照らして、その場面を詳細に記述し、考察がされている。
3. 体験した内容を踏まえて、その日の実習目標がどの程度達成されたのか、達成されなかったのか書かれている。
4. 上記の達成された・されていないと判断した理由について書かれている。
5. 判断の根拠となる客観的な事実が書かれている。
6. 要因を分析して具体的に書かれている。

7. 知識や技術など、専門性に基づいて考察をすることが出来ている。
8. 自立支援、自己選択・自己決定等の視点に基づいて書かれている。
9. 次の課題を明らかにすることが出来ている。

3.4 調査方法データ収集

2023年3月18日に、縁故法に基づき、介護教員講習会に参加している受講者（介護、医療、福祉領域の実践者、教員等）44名に対して Web アンケート方式で協力を依頼した。その結果、38名から回答があった。分析は Jamovi (ver.2.3.24) 及び「Statcel4」⁽¹⁰⁾を用いた。

質問項目は回答者の基本属性（年齢、現在の所属、実習日誌の指導経験の有無）、AI の考察文に対する評価指標（19項目）、学生の考察文に対する評価指標（同19項目）とした。なお、AI が作成した文章が含まれているかは伏せた状態で考察文の評価を依頼した。

3.5 倫理的配慮

調査にあたっては協力依頼状を講習時間外に配信し、調査の主旨、アンケート回答の有無・内容等が受講評価とは関係が無いこと、及び倫理的配慮について説明をした上で各人の自由意志に基づいて調査への協力を求めた。調査の実施及びデータの取り扱いについては、北九州市立大学における「人を対象とする研究に関するガイドライン」に則った。

4. 研究結果

4.1 回答者の属性

回答者の属性とその概要については、表1と表2の通りである。無効票は無く、回答率は86.4%であった。

回答者の年齢は平均 42.8±7.87 歳であり、介護教員講習会の受講者に調査への協力をお願いした影響からベテランと言える年齢層が中心となったと言える。現在の所属については、教育機関（大学・短大・専門学校等）が71.1%（27人）、福祉・介護の臨床現場（医療機関等を含む）が28.9%（11人）であった。実習日誌の指導経験の有無については、指導を行ったことがあるが68.4%（26人）、行ったことがないが31.6%（12人）であり、半数以上は実際に実習日誌の指導を行っ

た経験があった。これらを踏まえると、今回の回答者は、年齢的にも教育指導経験的にもある程度の経験をもったベテラン領域にある人が多かったと言える。

表 1 回答者の年齢

年齢	
N	38
欠損値	0
平均値	42.8
中央値	42.5
標準偏差	7.92
最小値	26
最大値	58

表 2 回答者の所属と指導経験

現在の所属	度数	全体%	累積%
教育機関（大学・短大・専門学校等）	27	71.1%	71.1%
福祉・介護の臨床現場（医療機関等含む）	11	28.9%	100.0%
実習日誌の指導経験	度数	全体%	累積%
実習日誌の指導を行ったことがある。	26	68.4%	68.4%
実習日誌の指導を行ったことがない。	12	31.6%	100.0%

4.2 合計点の比較

表 3 学生作成と AI 作成別に見た平均比較

項目	群	N	平均値	中央値	標準偏差	標準誤差
書き方合計点	学生作成	38	38.3	40	7.86	1.27
	AI作成	38	40.2	40	7.02	1.14
内容の合計点	学生作成	38	34.2	35	7.39	1.2
	AI作成	38	35.7	37	8.11	1.32
合計点	学生作成	38	72.5	74	14.39	2.33
	AI作成	38	75.9	78	14.38	2.33

表 4 ウィルコクソン符号付順位和検定の結果

学生作成	AI作成	検定方法	統計量	p	平均値の差	差の標準誤差
書き方合計点	書き方合計点	ウィルコクソンのW	210	0.054	-3	1.34
内容の合計点	内容の合計点	ウィルコクソンのW	181	0.123	-2.5	1.1
合計点	合計点	ウィルコクソンのW	195	0.031	-5	2.24

注: H₀: 測定値1 - 測定値2 ≠ 0

学生作成と AI 作成の考察文章について、書き方の評価項目群と内容の評価項目群ごとの合計点と、さらにそれを合計した合計点（総計）について、学生作成と AI 作成の対応のありの平均値の比較を、ノンパラメトリックのウィルコクソン符号付順位和検定（Wilcoxon signed-ranks test）を用いた。その結果（表3、表4）、書き方及び内容に関する項目群ごとの合計

点については、いずれの差も有意では無かった。

書き方の合計点と内容の合計点を合計した合計点（総計）については、学生作成とAI作成の平均点の差は有意だった（ $W=195$, $p=0.031$, 両側検定）。総合的に見ると、AI作成の方が学生作成よりも実習日誌の考察文章として評価が高かった。

4.3 評価項目ごとの比較

各評価項目の記述統計については表5の通りである。各項目について正規性の検定（Shapiro-Wilk test）を行ったところ、全ての項目のP値が0.05を下回ったため、全ての評価項目において正規分布とは異なっていると判定した。これを踏まえ、以下の各評価項目の平均値の比較（t検定）ではノンパラメトリックを用いることとした。

表5 全項目の記述統計

								シャピロ=ウィルク検定			
		N	欠損値	平均値	中央値	標準偏差	最小値	最大値	W	p	
学生作成	書き方	「常体（文末に「だ、である」を使う）」で文章が書かれている。	38	0	4.32	5	1.165	1	5	0.649	<.001
		いつ、どこで、だれが、なにを、どうしたのか、具体的に客観的事実が書かれている。	38	0	4.11	4	1.06	1	5	0.791	<.001
		要点が簡潔に書かれている。	38	0	3.74	4	1.131	1	5	0.856	<.001
		分かりやすい表現で書かれている。	38	0	4.03	4	1.078	1	5	0.774	<.001
		適切な専門用語や略語が使われている。	38	0	3.55	4	0.921	1	5	0.885	<.001
		1文の長さを35字以内になっている。	38	0	3.16	3	1.48	1	5	0.875	<.001
		必要時、利用者の言葉がそのまま書かれている。	38	0	3	3	1.47	1	5	0.879	<.001
		他から得た情報は情報源も書かれている。	38	0	4.16	4	0.973	2	5	0.793	<.001
		誤字・脱字がない。	38	0	4.13	4	1.018	1	5	0.765	<.001
	不適切な表現がない。	38	0	4.13	4	1.119	1	5	0.75	<.001	
	文章の内容	プライバシーへ配慮して、名前のアルファベット表記など匿名化されて書かれている。	38	0	4.37	5	1.125	1	5	0.618	<.001
		その日の実習目標に照らして、その場面を詳細に記述し、考察がされている。	38	0	3.74	4	1.032	1	5	0.884	<.001
		体験した内容を踏まえて、その日の実習目標がどの程度達成されたのか、達成されなかったのか書かれている。	38	0	3.53	4	1.156	1	5	0.887	0.001
		上記の達成された・されていないと判断した理由について書かれている。	38	0	3.45	3.5	1.132	1	5	0.893	0.002
		判断の根拠となる客観的な事実が書かれている。	38	0	3.87	4	1.07	1	5	0.79	<.001
		要因を分析して具体的に書かれている。	38	0	3.95	4	0.985	1	5	0.844	<.001
		知識や技術など、専門性に基づいて考察をすることが出来ている。	38	0	3.71	4	0.956	1	5	0.832	<.001
		自立支援、自己選択・自己決定等の視点に基づいて書かれている。	38	0	3.42	4	1.177	1	5	0.876	<.001
		次の課題を明らかにすることが出来ている。	38	0	4.18	4	0.955	1	5	0.75	<.001
AI作成		書き方	「常体（文末に「だ、である」を使う）」で文章が書かれている。	38	0	4.34	5	1.169	1	5	0.628
	いつ、どこで、だれが、なにを、どうしたのか、具体的に客観的事実が書かれている。		38	0	4.34	5	0.938	2	5	0.712	<.001
	要点が簡潔に書かれている。		38	0	4.42	5	0.826	2	5	0.702	<.001
	分かりやすい表現で書かれている。		38	0	4.32	5	0.873	2	5	0.755	<.001
	適切な専門用語や略語が使われている。		38	0	4.16	4	0.886	2	5	0.814	<.001
	1文の長さを35字以内になっている。		38	0	3.95	4	1.207	1	5	0.803	<.001
	必要時、利用者の言葉がそのまま書かれている。		38	0	2.76	3	1.515	1	5	0.859	<.001
	他から得た情報は情報源も書かれている。		38	0	3.34	3	1.279	1	5	0.898	0.002
	誤字・脱字がない。		38	0	4.32	5	1.068	1	5	0.669	<.001
	不適切な表現がない。	38	0	4.21	4	0.991	1	5	0.757	<.001	
	文章の内容	プライバシーへ配慮して、名前のアルファベット表記など匿名化されて書かれている。	38	0	4	5	1.356	1	5	0.737	<.001
		その日の実習目標に照らして、その場面を詳細に記述し、考察がされている。	38	0	3.79	4	1.143	1	5	0.852	<.001
		体験した内容を踏まえて、その日の実習目標がどの程度達成されたのか、達成されなかったのか書かれている。	38	0	3.89	4	1.203	1	5	0.802	<.001
		上記の達成された・されていないと判断した理由について書かれている。	38	0	4	4	1.09	1	5	0.813	<.001
		判断の根拠となる客観的な事実が書かれている。	38	0	3.95	4	1.184	1	5	0.803	<.001
		要因を分析して具体的に書かれている。	38	0	4.03	4	1.026	2	5	0.765	<.001
		知識や技術など、専門性に基づいて考察をすることが出来ている。	38	0	4.03	4	1.026	2	5	0.819	<.001
		自立支援、自己選択・自己決定等の視点に基づいて書かれている。	38	0	3.89	4	1.158	1	5	0.832	<.001
		次の課題を明らかにすることが出来ている。	38	0	4.16	4	1.027	1	5	0.758	<.001

表 6 書き方に関する評価項目における学生作成と AI 作成の比較

	N	平均値			ウィルコクソン順位	
		学生作成	AI 作成	差	P値	差
他から得た情報は情報源も書かれている。	38	4.16	3.34	0.82	< .001	1.5
必要時、利用者の言葉がそのまま書かれている。	38	3.00	2.76	0.24	0.323	0.5
「常体（文末に「だ、である」を使う）」で文章が書かれている。	38	4.32	4.34	-0.02	0.807	-7.28e-5
不適切な表現がない。	38	4.13	4.21	-0.08	0.662	-7.88e-5
誤字・脱字がない。	38	4.13	4.32	-0.19	0.264	-1
いつ、どこで、だれが、なにを、どうしたのか、具体的に客観的事実が書かれている。	38	4.11	4.34	-0.23	0.398	-0.5
分かりやすい表現で書かれている。	38	4.03	4.32	-0.29	0.198	-0.5
適切な専門用語や略語が使われている。	38	3.55	4.16	-0.61	0.003	-1
要点が簡潔に書かれている。	38	3.74	4.42	-0.68	0.005	-1.5
1文の長さを35字以内になっている。	38	3.16	3.95	-0.79	< .001	-1.5

※ P 値はウィルコクソン符号付順位和検定 (Wilcoxon signed-ranks test) による。

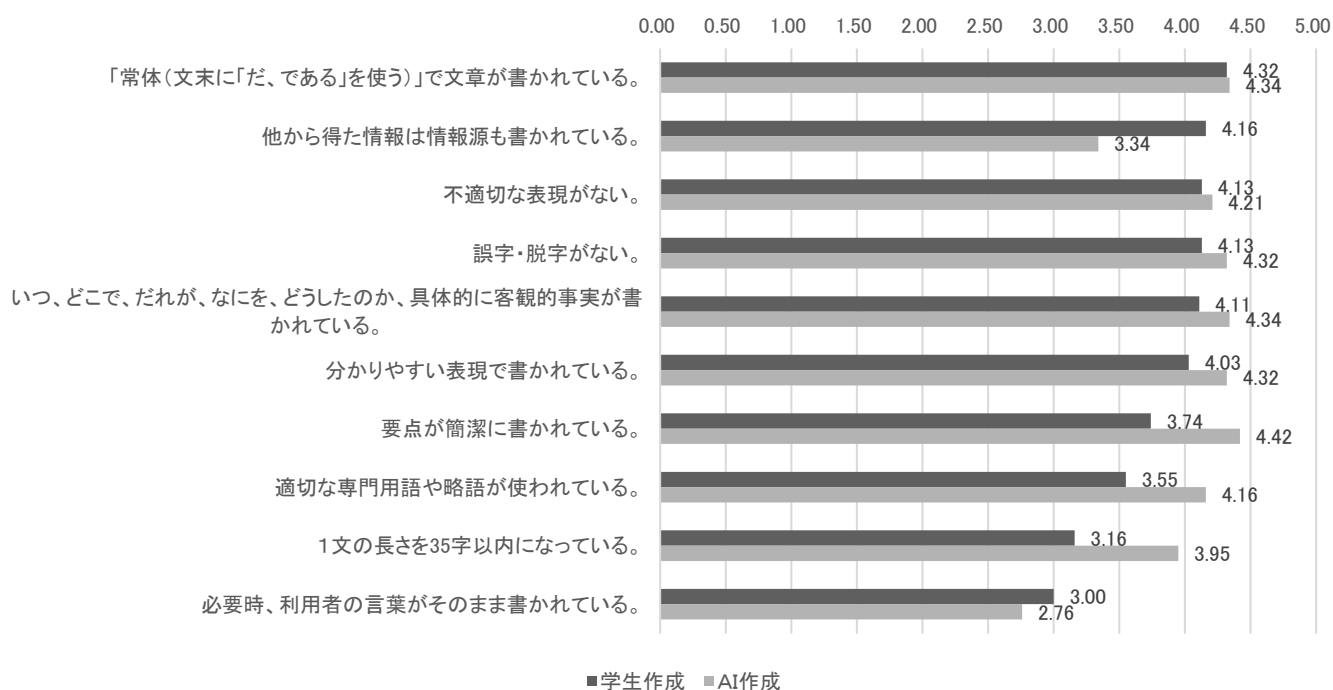


図 1 書き方に関する評価項目における学生作成と AI 作成の比較

学生作成と AI 作成で書き方に関する評価項目ごとの平均値を、ウィルコクソン符号付順位和検定 (Wilcoxon signed-ranks test) で学生作成と AI 作成の 2 群の各評価項目の中央値に差があるかどうかを検定して、帰無仮説である「学生作成と AI 作成では評価項目の点数に差は無い」を検証した。その結果 (表 6, 図 1), 学生作成の方が有意に最も高かった評価項目は「他から得た情報も書かれている」であった (差:0.82, $P<0.001$)。逆に AI 作成の方が有意に高かった (マイ

ナス差として表記) 評価項目は「1文の長さが 35 字以内になっている」(差=-0.07, $P<0.001$), 「要点が簡潔に書かれている」(差: -0.68, $P=0.005$), 「適切な専門用語や略語が使われている」(差: -0.61, $P=0.003$) の 3 項目であった。それ以外の項目についてはその差に有意性を認められなかった。

書き方に関する評価項目の比較から言えることは、①全体を通して AI 作成の方が評価が高い、②文字数や専門用語は AI 作成の方が評価が高い、③学生作成

の方が他から得られた情報まで書くことが出来ているの3点である。形式や専門知識といった点はAIの方が得意であるが、他から得た情報というその臨床場面を経験しているからこそ記述するが可能となる項目については、その臨床場面を経験した学生が自ら文章を作成するからこそ記述されるものであると言える。

次に考察内容に関する評価項目について、ウィルコ

クソン符号付順位和検定 (Wilcoxon signed-ranks test) で学生作成とAI作成の2群の各評価項目の中央値に差があるかどうかを検定して、帰無仮説である「学生作成とAI作成では評価項目の点数に差は無い」を検証した。その結果(表7, 図2), 学生作成の方が評価が有意に高い項目は無かった。それに対してAI作成の方が有意に高かった(表ではマイナス表記)のは

表7 考察内容に関する評価項目における学生作成とAI作成の比較

	N	平均値			ウィルコクソン順位	
		学生作成	AI作成	差	P値	差
プライバシーへ配慮して、名前のアルファベット表記など匿名化されて書かれている。	38	4.37	4.00	0.37	0.067	1
次の課題を明らかにすることが出来ている。	38	4.18	4.16	0.02	0.978	0.000053
その日の実習目標に照らして、その場면을詳細に記述し、考察がされている。	38	3.74	3.79	-0.05	0.59	-3.89e-5
判断の根拠となる客観的な事実が書かれている。	38	3.87	3.95	-0.08	0.609	-8.40e-5
要因を分析して具体的に書かれている。	38	3.95	4.03	-0.08	0.538	-1.37e-5
知識や技術など、専門性に基づいて考察をすることが出来ている。	38	3.71	4.03	-0.32	0.036	-1
体験した内容を踏まえて、その日の実習目標がどの程度達成されたのか、達成されなかったのかが書かれている。	38	3.53	3.89	-0.36	0.052	-1
自立支援、自己選択・自己決定等の視点に基づいて書かれている。	38	3.42	3.89	-0.47	0.028	-1
上記の達成された・されていないと判断した理由について書かれている。	38	3.45	4.00	-0.55	0.004	-1

※P値はウィルコクソン符号付順位和検定 (Wilcoxon signed-ranks test) による。

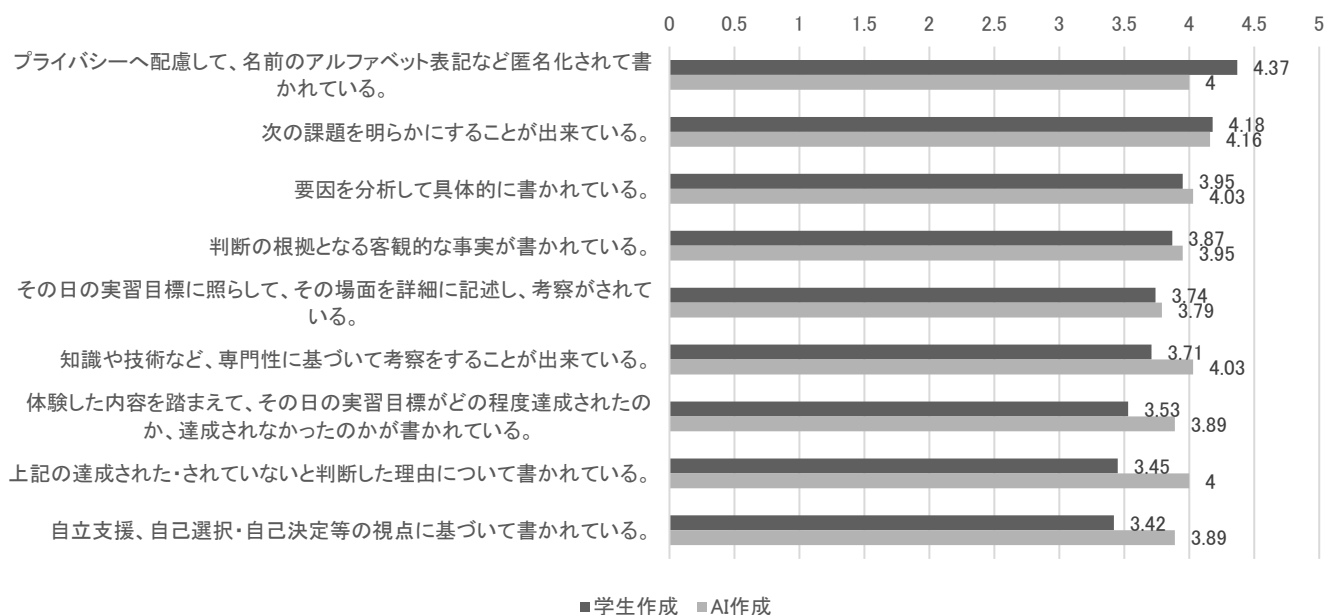


図2 考察内容に関する評価項目における学生作成とAI作成の比較

「上記（実習目標）の達成された・されていないと判断した理由について書かれている」（差：-0.55, P=0.004）, 「自立支援・自己選択・自己決定等の視点に基づいて書かれている」（差：-0.47, P=0.028）, 「知識や技術など, 専門性に基づいて考察をすることができている」（差：-0.32, P=0.036）の3項目であった。それ以外の項目は帰無仮説を棄却できなかった。これらから言えることは, 考察内容においても AI 作成の方が全体的にも評価は高かったということである。

5. 結果の考察

以上の研究結果について, 専門職として求められる判断の根拠を書くという点や自立支援・自己選択・自己決定等の福祉における基本的視点に基づいて書くことが出来ているかどうかでは, AI の方が評価が高かったという点は注目に値する。また実際に体験した学生と, 実際には体験をしていない AI の間に具体的な記述に関する項目でも差が認められなかったという点は, AI が作成した文章でも実習という臨床体験をした者と同等レベルの文章を作成することが可能であるということを示していると言える。

この点について掘り下げると, 実習記録を指導者がそこに書かれている考察文章を「誰が書いた文章か」見抜くことは難しいのではないかと考えられる。AI を活用することで, 実習生としては短期的には実習日誌の考察文章を容易に作成することができる。自らの経験をどのように考察文章へと書き上げていけば良いかという「見本となる文章」から, どのように考察文章を書けば良いのかというコツを得るという点では大変有効であろう。しかしそれは, 中長期的には専門性に基づいた考察や対象者の機微への気付きなど, 実習経験の中で獲得する学びを得る機会を逸するとも考えられる。そうすると, 実習記録とは何か, さらに実習で学生は何を学ぶべきかという根本的な教育目標の再考と, AI が活用されることをどのように織り込んでおくのが, 次に検討すべき課題であると言える。

6. おわりに

今後の研究の展開としては, 学生が作成した文章が AI を上回ることはあるのか, あるとした場合, 何日目

あたりで上回るのかを調査することが考えられる。併せて, AI に実習日誌データとソーシャルワークの専門知識について学習させた場合, どのような考察文を生成するのかを実験するテーマも考えられる。ソーシャルワーク教育における, 文章生成 AI の活用に関する研究の端緒につくことはできたと言える。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 19K02977 の助成を受けたものである。考察文章の提供に協力してくれた学生に, この場を借りて御礼を申し上げる。

参考文献

- (1) 坂本毅啓, 佐藤貴之, 中原大介: “福祉職・保育者養成教育における ICT 活用への挑戦 - より深い学びと質の高い支援スキル獲得を目指して -”, 大学教育出版, 岡山 (2019)
- (2) ソーシャルワーク教育学校連盟編: “厚生労働省 令和4年度生活困窮者就労等準備支援事業費等補助金(社会福祉推進事業分) 「平常時の社会福祉士養成課程における ICT 活用方法の検証に関する調査研究事業」実施報告書”, 日本ソーシャルワーク教育学校連盟, 東京 (2023)
- (3) 坂本毅啓, 佐藤貴之, 中原大介: “実習記録の ICT 活用に反対する意見の検討”, 地域ケアリング, Vol.23, No.9, pp.52-55 (2021)
- (4) 公益社団法人日本社会福祉士会編: “新版 社会福祉士実習指導者テキスト”, 中央法規, 東京 (2022)
- (5) 一番ヶ瀬康子監修, 木下安子: “介護福祉ハンドブック 介護実践記録の書き方”, 一橋出版, 東京 (2005)
- (6) 一般社団法人日本社会福祉士養成校協会編: “相談援助実習指導・現場実習 教員テキスト 第2版”, 中央法規, 東京 (2015)
- (7) 相澤譲治, 九十九綾子編相談援助実習 一養成校と実習先との連携のために一”, 電気書院, 東京 (2016)
- (8) 富川雅美: “よくわかる介護記録の書き方 第5版”, メヂカルフレンド社, 東京(2017)
- (9) 杉本浩章・田中和彦: “実習生必携 ソーシャルワーク実習ノート [第2版]”, みらい, 岐阜 (2015)
- (10) 柳井久江: “4Steps エクセル統計【第4版】”, オーエムエス出版, 東京 (2015)